

いきもの記

Vol.133 2025.2.26

地歴公民科 稲見真梨

地理の視点でいきもの記・沖縄で考えてみた！ マングローブとエビの関係

2月4日から6日にかけて、2年生と一緒に沖縄修学旅行に行ってきました。科学技術高校での修学旅行引率は初めてだったので、科学技術高校ならではの行程や、そこでのみんなの反応はどんなものなんだろう！とわくわくしながら参加させてもらいました。

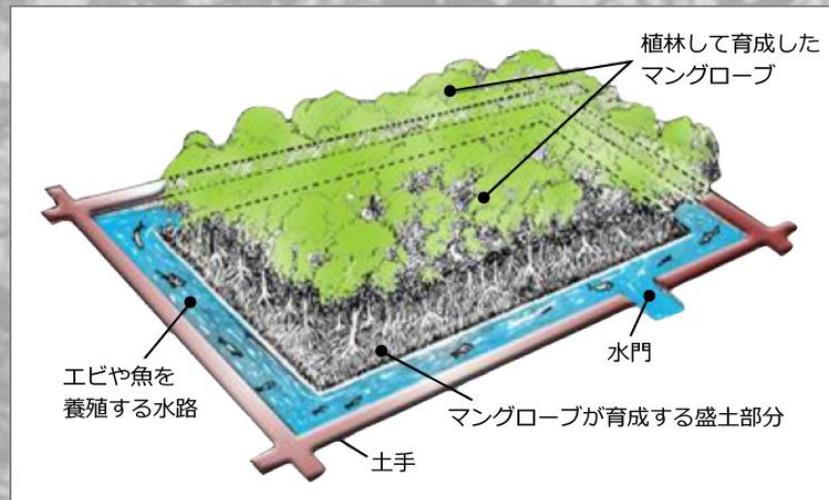
今回は体験活動にマングローブ散策がありました。マングローブは理科界限ではなじみのある植物だと思いますが、実は地理の教科書や資料集、模試などにも登場する**地理にとってもよく出る植物**なのです。今回は毎号楽しみに読んでいるいきもの記の紙面をお借りして、**地理の視点からみるいきもの記**を書きたいと思います。

マングローブは、熱帯や亜熱帯地方の真水と海水が混じりあう汽水域に、海水の塩分濃度に耐えられる植物があつまってできる林・森のことを指します。今回たくさん見ることができた植物は**メヒルギ**や**オヒルギ**でした。海水で植物が生きるのがどれほど大変なのか、マングローブはどれほど生き物にとって大切なのかはみんなのほうが詳しいでしょう。**地理屋の中では東南アジアのマングローブ**が注目されています。

現在マレーシアやベトナムではマングローブを伐採し、**エビの養殖池**に代わっています。養殖ではたくさんの餌や抗生剤を撒くため、水質が悪くなり、生産量が落ちるとまた別のマングローブを伐採しています。養殖されたエビの多くは日本に輸出されています。私たちの食が東南アジアの環境を変化させているのです。(2023年日本のエビの輸入先1位はインド、2位はベトナム。スーパーで産地を見ることは地理受験者なら必須の行動！！)

マングローブは高潮や津波の被害を軽減させる役割や、河川から海への土壌流出を防ぐ役割を持っています。発展途上国である東南アジア諸国では日本のようにインフラが整備されておらず、**自然災害の被害は増大**する傾向があります。マングローブの伐採は環境問題だけでなく、日常生活のリスクにも関係しているのです。

では、エビの養殖をやめればよいか、というとても簡単な話ではありません。なぜなら**エビの養殖は儲かるから**です。雇用も生みます。国が豊かになればインフラも整備され、教育やその他の産業の発展にもつながるかもしれません。経済発展と環境問題をどう両立させていけばいいのか、調べたところ**シルボ・フィッシャリー**というマングローブの植林と養殖を同時に行う方法があるようです。持続可能な開発という言葉が生まれてずいぶん経ちますが、答えのない問いを理系・文系関係なく考えていけたらおもしろいと思いませんか？自然や科学を愛する皆さんに向けて、社会学、経済学的な視点での専門的な講義があれば、もっと思考が深まるだろうなあとひそかに思っています。



シルボ・フィッシャリーで検索してみよう！(画像：ワイエルフォレスト株式会社より引用)



沖縄のマングローブ

本当にタコの足みたいな立派な根っこ！沖縄は南部と北部で地質も自然環境も全く違うので、両方見ることができた2年生は、とても貴重な経験ができたと思います。



オヒルギの種子※

独特な形にびっくり。上の赤い部分がたこさんウイナーみたい！と大盛り上がり。これが地面にポトッと落ちて、生き物が穴に運んで根付いていくという話に自然のおもしろさを感じました。

※佐藤補足：「胎生種子」といい、種子が母樹についたまま胚軸を伸ばしている状態。普通の種子とは異なる独特な姿。散布体ともいう。